の齎し來つたものでなく、我が朱印船のカガヤンより齎し歸つたものであると考へるのである。

私は先年平戸に行きて其地の舊家に就て古文書を見たのであるが、木引田町の藤川藤吉氏方に於て二三の面白き文書を見た、同家の祖藤川藤左衛門は長崎出島銀場の役人であつて其妹は阿蘭陀通詞横山與三右衛門の妻であり其子忠兵衛は京都角倉氏の朱印船に乘て海外貿易に從事したこともある家柄であるが、其家に宛てゝ京の角倉の家人から音信物の禮狀を多く寄せて居る、其中に烟草を贈られたる禮狀が五通ばかりあつたと記憶する、平戸の烟草は上方に於て賞美されたことが判るのである、平戸に於て政府の專賣制度實施まで煙草を栽培して居たことは畏友山鹿文學士が私に告げられた實話である

以上迦加安に關する考證は昨年九月大阪朝日新聞社より出版した所の拙著德川初期の海外貿易家中に之を論究して置いたのであつて、さうして平戸を以て烟草の始植地と推論することは同書に於ては未だ言及しなかつたことである。

批評

『肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴』（京都帝國大學文科大學考古學研究報告第一册）を讀む

文學博士　喜田貞吉

一、概評

肥後及び筑後地方に於て一種の裝飾を有する古代墳墓の現存する事は、夙に學界に紹介せられ、斯道學者の注意を惹く所なりしが、近來熊本縣に於て遺蹟調査保存の擧ありて、更に少からざる新例を學界に提供するに至れり。我が濱田助教授こゝに見る所あり、昨年末より本年初に渉り、梅原教務囑托を隨へて其の實地を調査し、其の中肥後に

關するものゝ研究を纏めて學界に報告せられたるもの、即ち本書なり。

古墳墓の研究の學界に報告せらるゝもの、從來其の數甚だ多し。然れども、斯くの如く其の或る種類のものを網羅して、或る一貫したる系統の下に、其の研究を發表したるものは蓋し本書を以て嚆矢とす。殊に著者が考古學者として、其の纏りたる研究を發表するに當り、從來比較的學界の調査の手の屆かざりし、且つ其の一地方に局限せられて或る特別の意味あるべき、此の裝飾ある古墳横穴を採られたるは、選擇當を得たりと謂ふべし。之を肥後とのみ限られたるは、此の種の研究報告として稍遺憾なき能はざれども、而も其の說く所、必要上筑後及び備中・常陸の古墳、並びに本邦各地發見の一種の劒頭及び埴輪等の、類似の文樣にまで及び、殊に其の報告も亦、漸次熊本縣の殘部及び福岡縣に及ばんとせらるゝ豫定のよしなれば、今に於て深く問ふを要せざるべし。

著者の本書を發表せらるゝや「其の目的の主とする所は事實の報告にありて、敢て學說の建立にあらず、たゞ之によりて學者將來の研究の資料を提供」（三頁）するにありと言ふ。其の態度極めてよし。而して本書は殆ど遺憾なく其の目的を達し得たるものと謂ふを憚らざるなり。本書章を分つこと六。其第六章後論を除きたる他の五個の章に於ては、盡く忠實なる事實の報道のみを事とし、本書本文百四頁中、實に其の七十九頁と、四十六葉の鮮明なる圖版とは、全く之が爲に費さるゝなり。其の第六章後論は之を四節に分ち、第一・第二の両節に於ては、裝飾模樣の種類と其の意義とを說き、第三節に裝飾古墳に關する年代の臆說を試み、其の第四節は結論として、此の裝飾古墳の他の古墳と異なる点あるは、年代上又は民族上の差異に基づくにあらずして、單に支那文化の影響として解す

るの外なしと論ぜられたり。其の裝飾模樣の種類と意義とを說き、裝飾古墳の年代を論ずるは、裝飾古墳存在の事實を報道する本書に於て、必要なる事に屬すと雖、本書の目的とする上より言はゞ抑末なり。結論として裝飾古墳の由來を言ふもの、亦著者に取りて多大の興味を感ぜられたる所なるべきも、而も之を言はんが爲に、引いて九州古代の民族を論ぜらるゝに至りては、本書に取りては畢竟一の餘技ならんのみ。著者亦敢て其の謂ふ所の年代を以て決定的のものとするの野心なく、其の民族論に就きても、本書は『畢竟之が研究の資料を提供するに在りて、之が解決を直ちに試みんとするは今なほ困難とする所』九九頁なる由を告白せらるゝ程なれば、著者に於て敢て重きを置かれざるは明かなり。されば余輩は、此の裝飾模樣の意義並に由來に就きて多少の異りたる說明を試むるの餘地あるを認め、是等古墳墓の年代に就いても、他方面より今少しく攻究を重ぬるの必要を感じ、特に其の民族觀に就きて、又裝飾古墳墓の特に此の地方に多き理由の說明に就きて、根本的に異りたる意見を抱持すとは雖、そは自ら別個の研究にして、本書に取りては畢竟枝葉の末のみ、其の研究の結果が如何に落着するとも、固より敢て本書の價値に多くの輕重を加ふるものにあらず。著者の是等に關する見解は、著者自ら明言せらるゝ如く、もと一の假定の臆說に過ぎず。著者が忠實に提供せられたる此の有益なる幾多の資料によりて、幸に學界の進步を促し、是に由りて著者の假定の臆說が成立を見るに至るとも、或は崩壞を招くに至るとも、そは固より著者の希望に副ふ所以にして、亦以て著者の滿足とせらるゝ所なるべし。

學界は實に多大なる感謝を以て著者の此の忠實なる、且つ用意周到なる調査報告を歡迎せるなり。著者の報告せられたる是等古墳の或る者は、余輩

既に親しく之を踏査せり。籍を中央學界に有する考古學者諸氏の中にも、既に其の或る者を調査せられたるもの少きにあらず。然れども、其の全部を通じて斯の如く之を一書中に纒め、之が比較研究を自由になすを得るに至れるは、一に本書の賜なり。著者の調査と記述とは共に丁寧懇切なり、挿入の實測圖と寫眞と柘本とは、孰れも鮮明にして要領を得たり。余輩の如く其の遺蹟の幾許かを實査せるものは勿論、初めて之に接する人々にありても、本書によりてよく其の實地の狀態を腦裏に描出印象するを得べく、讀者はもはや親しく之に臨むの必要なき迄にも、本書は實に用意周到なるものなり。余輩は實に本書を以て、考古學的遺蹟報告の白眉として、世に推奬するを憚らざるなり。特に余輩に取りては、目下古墳墓の年代研究に熱中し、倭人の民族的調査に沒頭する際に於て、此の倭人住居の地方、特に最後まで彼等が肥人（くまびと）として殘存したりと認めらるゝ地方に關して、多數の資料を忠實に提供せられたる事に於て、絶大の感謝を禁ずるを得ず。余輩の研究に若し向後多少の進歩を見るを得ば、是れ一は實に本書の賜なり。以下本書を評するに當り、年代に就きて說をなし、民族に就きて論を立つるに於ても、直接に本書より啓發せられたる所少からざるなり。

本書は實に考古學的報告として、殆ど完璧に近きものなり。敢て多く言ふべきものあるを見ず。たゞこゝに余輩が本書を通讀し、之を寫眞及び實測圖に對比する際に於て感じたる所を一言して、一は著者の考慮を促し、一は世の考古學的報告をなさんとする者に向つて、參考の資に供し、以て著者の賜に酬ひんとするの一事あり。乃ち附記して概評を丁らんとす。そは實地の寸尺に關する數字の記述方法是なり。余輩初め本書を讀み、其の寸尺に關する數字の頻出する事に於て、頗る煩は

しきを感じたり。更に之を實測圖と對比する事に於て、彼此甚だ多く齟齬するものあるを發見したり。寸尺の數字は實地を說明するに於て必要缺ぐべからざる所。もとより之を除く能はず。然れども本書の如く、甚だ忠實に精密なる多數の實測圖を伴へる場合に於ては、特に其の說明に心要なるものゝ外は、成るべく之を實測圖に讓りては如何。是れ啻に記述と紙數とを節約し得るのみならず、讀者をして容易に要領を腦裏に印象せしむるの上に於て、利益少からずと信ずるなり。本書に於て其本文と實測圖との間に齟齬を來せるもの多きは、著者が本文を記し終りたる後、更に實地に就きて再調を加へ、以て實測圖を調製せられたるが爲なるべく、校正の際本文を此の新圖によりて訂正するの暇なかりし結果なるべし。されば余輩は、是を以て、むしろ其の學に忠なるの態度を賞すべく、又其の齟齬中の多數は、既に再度の正誤表によりて訂正せられて、讀者に取りて甚しき不足もなかるべければ、今にして之を追及するの要を見ず。又實測上些少の寸法の相違の事は、何人と雖も免るゝ能はざる所にして、たとひ些少の齟齬ありとても、是が研究の成果に於ては、爲に何等の不都合を生ぜざるべければ、敢て問ふに及ばざるべきも、同一書中に於て、彼是矛盾を來せるものあるが如きは、ともかくも失態たらざるを得ず。而して之を致せる所以のものは、亦實に實測圖以外本文中に、煩しく數字を羅列せるが爲ならずんばあらず。されば將來の報告書は、差支なき限り成るべく數字を實測圖に讓り、又其の實測圖は、之を卷末の圖版中に收むる事なく、差支なき限り成るべく本文中に挿入して、彼是對照の便に供せられたきものなりと思考す。

更にこゝに概評を終るに際し、本報告發表の形式に就き、一言著者濱田君に對して敬意を表せん

とす。本書の成る、濱田・梅原両氏の調査に基づけるは言ふ迄もなし、其の本文中の或るものと、實測圖とが、梅原君の手を煩はしたることは余輩亦之を認む。著者梅原君が古墳の實際に就き、造詣深き事、亦既に學界の認むる所なり。然れども這般の調査と云ひ、又報告の編成と云ひ、大部は實に濱田君の腦漿と手腕とを煩はしたるものにして、梅原君は其指導の下に、助成の勞を執られたるに過ぎず。されば世間普通の場合には、本書は專ら濱田君の著として、精々其の序言に於て、『梅原君を煩はす所多し』位のお世辭に終るを例とすべきなり。然るに濱田君は、强て之を梅原君との合著として發表せられたり。斯くの如きの內情を暴露する事の可否如何につきては、余と雖も一考せざるにあらず。又斯くの如きの內情を暴露する事が、却つて著者等の迷惑とする所なるべきを顧慮せざるにあらざるも、一將功成りて萬卒枯るゝを常とする當世にありて、濱田君の雅量と、よく後進を誘掖せらるゝの態度とは、之を賞揚せざるべからず。乃ち敢て所感を附記す。請ふ恕せよ。

二、本書使用の術語に就きて

考古學上使用の術語には困難なるもの多し。其の棺・槨・壙の用語の如き、余輩の現に『歴史地理』誌上に於て攻究しつゝある所のものなり。又調査研究の進歩に伴ひ、新に術語を作成せざるべからざるもの少きにあらず。余輩は是等に對して、少くも我が考古學者間通用の術語の一定を希望するや久し。今本書を評するに當り、聊か所感を述ぶる、亦徒勞にあらざるを信ず。

一、巨石建造物〇一頁

巨石建造物なる術語の由來は、著者の加へられたる自註よりして之を知るを得たり。然れども、我が古代墳墓を以て、大体に於て其の系統に屬すと謂ふを得べきや否やは疑なき能はず。余輩が支

那上代の王者の陵の遺風なりと解する横口式の壙を以て、之に屬せしめ、是と系統を一にすと認めらるゝ横穴をも之に加へんとするは可なり。然れども、我が上古陵墓の如き縱穴壙の墳墓をまでも、悉く同系統中に置かんとせば如何。余輩の信ずる所によれば、石室を有せずして直ちに石棺を埋め、若くは單に木棺を埋めて、他に何等石製裝置を發見せざるものは、これ縱穴式石室古墳の省略、若くは墮落にあらずして、石室古墳は却つて此の式の古墳の發達せるものなりと解するなり。我が考古學者中には、古墳墓は横口式石室を有するを常なりとし、往々其の石室なきものあるを見て、却つて奇怪に感ずるものなきにあらざるも、そは石室を有するものが偶々多く後世に保存せられたるを目擊するに慣れたる結果にして、未だ未紹の難に遭はざる地方の古墳群には、石室なきもの多きに居るを常とするなり。又石室を有するものと雖、縱穴式壙にありては通例小石を積み重ねて作れるものにして、こは土壙の進歩せしものなりと解すべく、石棺亦もとこれなきを本體とすべし。隨つて是等の古墳墓をも包含して、悉く巨石建造物の系統に編入せんには、未だ精しからざるの憾なきにあらずと思考するなり。

二、石室

從來考古學者間に普通に『石槨』なる誤りたる術語を使用せしものに對して、著者は往々『石室』なる語を用ひらる。石を以て築成せる壙に對して石室の語を用ふると、支那・朝鮮にも既に前例あり。隨つて著者の之を用ふる敢て不可ならざれども、更に一歩を進めて石壙の語を用ひては如何。石壙の語亦前例あり。而して其の『壙』には古く『墓穴』なりとの解あれども、『室』の語には墓穴の意義あることなきを思ふべし。

三、古墳及び横穴

是れ從來考古學者間普通の用例によれるもの、余輩亦不滿足ながら時に此の語を使用するなり。然れども、横穴亦一の古墳なり。之を以て墳墓にあらず、古人居住の址なりと解せし時代にありては、兩者の名稱を對比する亦可なりしならんも、今日の學界に於て、殊に著者新に帝國大學に考古學講座を擔任し、斯學界に一新機運を誘致せんとせらるゝに當り、依然此の誤解し易き名稱を踏襲するは遺憾なきにあらず。況や報告書の題名に於て之を用ふるをや。

三、槨壁（〇八頁等）障壁（〇三八頁等）槨障（〇同上）障屏（〇二一頁等）

槨は棺の容器にして、壙内に安置すべきものなり。其鄭重なるものに至りては、石又は甎を以て造り、豫め之を壙内に設備するあり。之を石槨又は甎槨と稱す。從來我が考古學者間に於て、壙を成せる石室を石槨と稱したりし誤解は今更言ふまでもなし。今著者此の壙を表はすに『石室』の語を以てし、其の石室内に設備せられたる一種の石造裝置を以て『槨』と稱す。最も可なり。井寺・千金甲及び日輪寺等の古墳に見るもの、實に槨の一種なり。其の槨内更に板石を以て之を數區に區劃する場合に於て、本書は其の區劃をなせるものを呼びて障壁・槨障・障屏等の語を以てす。こは横穴古墳内に於て往々見る所の、所謂屍床の限界をなせる部分に相當するものなれば、是等を通じて何とか一定せる適當の名稱を求めたきものなり。本書には又往々右と同一の語を、他の場合に混用せられたる所あり。圖版三十四に大坊古墳石室内槨障與壁の語あるが如き是なり。こゝに槨障なるものは、本文〇五九頁に於て、『石厨子とも稱すべき槨』と云へるものにして、井寺等に於けるものとは頗る趣を異にせるもの。若し本文の方針に從へば、當に槨の與壁とあるべきものなり。斯くの如き混用他にもあり。蓋し用語一定せざるの致せる所のみ。若し夫

れ不知火村の古墳の石室を以て槨壁式〇二五頁なりと言はるゝに至りては、誤解の虞なきにあらず。槨壁とは必ず其の外部に壙の存在を必要とす。而して是は性質に於て全然石壙なり。其の壙内に別に家屋形石槨所謂石棺を藏するものなり。

四、槨〇五九頁等　石槨〇四三頁等　石棺〇二六頁四七頁等

本書又、肥後・筑後地方の石壙内に多き、一種石厨子樣の裝置を呼ぶに、『槨』の語を以てす。是れ實に余輩の意を得たるもの、双手を擧げて贊同の意を表すべし。筑後童男山古墳、肥後千金甲第三號古墳、同大坊古墳、同阿蘇お藏穴古墳等に於て見る所の石厨子樣のもの、若くは是と同一系統に屬すと認めらるゝものは、齊しく皆石槨の一種なり。而して余輩は之を以て、井寺等に於ける裝置と、普通に石棺と稱せらるゝ所の槨との中間に立つものなりと信ずるなり。

本書又往々石槨・石棺の語を、種々の形式のものに對して使用せり。著者が不知火村なる壙内の文樣ある堀拔式石槨を以て、舊例によりて『石棺』と呼べるは、今日の場合敢て異議を挿まずゝ此の種のものが亦石槨の一種たるべきことは余の確信する所なれども、本邦に於て之を石棺と呼び來れる事因襲頗る久しく、一方には石槨の語を以て壙の場合に誤用し來れる慣習の存するあるが故に、今にして忽ち從來所謂石棺を以て石槨と呼び改めんには、彼是混淆するの虞なきにあらず。故に余輩は暫く舊に從ひて之を石棺と呼ばんとするを妨げざるなり。然れども、本書が阿村大戸南古墳〇四六、四七頁に就いて、同じく板石を以て組み合せて成れる長方形箱狀の、二個の石製裝置につき、其の大なるを『石槨』と稱し、小なるを『石棺』と稱するに至りては、到底贊意を表する能はず。大なるものが石槨ならば小なるもの亦石槨なるべし。現に本書には、千金甲第四號古墳に就きて、後者と相讓らざ

る程の大さを有する類似の裝置に對して、明かに『石槨』〇二頁の語を便用せるなり。斯くの如きも畢竟用語の一定せざる結果のみ。而して余輩は、此くの如き類のものは、むしろ石壙の一種として解せんとするなり。

五、直孤紋

本書は井寺古墳の槨壁、不知火石棺の蓋、或る鰹頭、埴輪の破片等に施せる、直線・孤線配合の一種の文樣に附するに、『直孤紋』の名を以てす。而も單に直線・孤線を配合するのみならんには、是等とは全く異りたる種々の形式の文樣をも作成し得べく、直孤紋の名未だ以て其特徵を示すに足らざるなり。さればとては余輩は、未だ之に代ふるの適當なる名稱を考へ得ず。むしろ考古學者の理會に任せて、其の最もよく完備せる、且つ最も多く學界に紹介せられたる、井寺古墳の名を取り、井寺式文樣と名付けては如何。

以上たゞ讀過の際心づきたる數個の用語に就いて言をなせるのみ。他にも協定を要すべきもの亦これなきにあらざれども、あまりに煩はしければ今はすべて略しつ。

三、裝飾模樣の種類と其の意義とに就いて

本書の裝飾模樣に就いて下せる解說、大体に於て我が意を得たり。其の所謂直孤紋を以て、組紐を卷きたる形より來れりとする点に於ては、未だ俄かに贊意を表する能はざるも、其の大洋洲に多しとの注意は、余輩に取りて良き材料を與へられたるものとして、感謝せざるを得ず。たゞに此の模樣のみならず、三角模樣・丸模樣、亦明かに南洋に多し。著者は之を以て、『古代未開人の裝飾に對する意匠の全く同軌に出づるもの』〇八頁として、偶合なりと解せんとせらるべきも、余は之を土俗及び文獻に徵して、南方系統の意匠なりと解せんとす

るなり。トラック島の集會所には、好んで赤色の三角模樣を用ふ。こは女陰の表章にして、青年は之を見て少からず春情を挑發せらるゝなりといふ。或は魚形より導かれたる三角模樣ありと聞けり。而して丸模樣亦少からざるなり。されば著者の所謂純模樣式のものは、多く南方系統に屬すと解し得らるゝが如し。其の實物模寫のものは、なほ磐井の墳墓に石人・石馬を樹てたると、同意義に解すべきものならんか。是等のうち、其の石人樣のものは、當時の武人、特に此等の地方に於ける肥人・久米部等の態を摸したるものならんと思考せらるゝなり。特に千金甲第三號塚石室內、並に石貫橫穴の或る者に刻せる刀劒が、所謂頭椎劍に類し、其の劍が、もと久米部・隼人等の帶ぶる所なるを思ふに、是等の地方に限りて特に是等の裝飾を有し、若くは石人石馬を樹てたる古墳墓の多く存する理由、自から解すべきものあるが如し。余輩の頭椎劍なりと信ずるものは、往々にして九州其の他本邦各地より發見せらるゝ所にして、其の槌狀をなせる鹿角製の劒頭には、所謂直孤紋を刻せること、本書引用せる所の如し。是れ久米部若くは隼人の移住分布を示せるものにして、事は拙著久米部考（倭人考の中）に述べたるが如し。本書又所謂直孤紋が近畿の古墳より發見せらるゝ埴輪の表面に存する事實を紹介せらる。是れ最も有益なる資料を學界に提供せられたるものなり。埴輪の土偶が往々にして天孫民族の以て身を汚すの所爲とする所の丹朱を顏面に施して、近習の隼人（若くは倭人久米部等）の態を表示せるもの少からざるの事實と相俟つて、恐らくは彼等の有する楯等に施されたる文樣が、此の九州の一地方に多き古墳の裝飾模樣と、或る系統を有することを示せるものなりと謂ふべきなり。

四、裝飾古墳の年代に就て

著者は是等裝飾古墳の年代に就て假定年代表を

製し、井寺・千金甲・日輪寺・不知火等の其れを以て最古とし、日奈久・鼠藏・阿村及び玉名墳は、前者の墮落的傾向を有するものなるが故に、之を其の次の年代に列せんとす。考古學的研究者の態度として、大体に於て異議あるべからず。然れども、其の文樣の或る者が、應神・仁德等、諸陵の埴輪の文樣に似たるものあると、日輪寺の古墳より六朝頃の鏡を模したりと思はるゝものを出せりとの事とよりして、直ちに之を西紀六世紀の初より七世紀の初頃のものと假定せんとせらるゝは、範圍聊か狹く、最高限聊か低きに失せずやと思はるゝなり。六世紀の初はほゞ筑紫國造磐井全盛の頃にして、七世紀の初は聖德太子の時代なり。今之を墳墓の形式に就いて見んか。九州に於ける倭人王の横口式墳を有する大古墳墓の制が、恐らくは漢魏の代に於て傳來し、而して西晋初以後倭人と漢土との直接交通の中斷せる事を思ふに、井寺式石槨は、或は其中斷以前に漢土の風を移せしものゝ傳來せるなりと想像すべく、隨つて此の種の墳墓年代の最高限は、之を神功皇后熊襲倭人征伐以前、遲くも西晋の初に置くを至當なりと考ふるなり。鑑鏡の年代を言ふもの、未だ絶對的信賴を置く能はず。日輪寺古墳より出でたるものが、よしや六朝式のものなりと認めらるゝとも、之を三國末若くは西晋の頃に置きて、敢て甚しき差支なかるべし。而して其の所謂直孤紋なる者が、應神・仁德陵等の或る埴輪の文樣に似たりとのことは、之を以て應神・仁德朝よりも遙に後に置かんよりは、むしろ少くも其の當時にまで、其の最高局限を上し得べき一傍証を提供するものなりとも解し得ずや。因に云ふ仁德の崩年は古事記によるに西紀四二七年にして、西晋の初期、倭人交通の最後は西紀二六六年なり

次に著者は、石貫の横穴を以て井寺の古墳よりは遲くとも古かるまじく、而して井寺のを西紀六世紀頃と定めたれば、是は六世紀の中頃より、七

世紀頃迄のものなりと假定せんと試みられたり。其の最低年限を論ずるに於て、奈良朝前後に至りて九州と畿内地方との間に、文化上の大なる差異あるべからずとの前提の下に、奈良朝若くは其れに近き時代以前と定められたるは、理由に於て異議を容るゝの餘地あれども、結果に於ては異論あるべくもあらず。されど其の瓦葺屋蓋風の裝置あるよりして、之が最高限度を六世紀の中頃、欽明天皇の代佛敎渡來の頃を擬したるは如何。大和朝廷と支那との交通は既に是より前に於て屢々行はる。其通路に當る九州地方、亦支那の影響を受くる多かりしを疑はず。其の石貫に於ける瓦葺屋蓋風の裝置が、横穴内の造付石槨（本書に所謂石厨子）に施されたるは、當時此の地方にかゝる建築の實地に行はれて、後に墳墓内に之を模したりと解すべきか、はた未だ其の普通に行はれざる以前に於て、支那に於けるかゝる風を傳聞し、之を壙の裝置に施したりと解すべきかは、自から一の問題たるべきも、余輩は其の製作上の技巧よりして、未だ親しく瓦葺の家屋に接せざる技術家の手に成りたりと、解したく思ふなり。隨つて其の年代の最高限は、井寺等の古墳の最高限の引上げと相伴ひて、又其の丸・三角等の原始的文樣の、多く施されたる事よりして、今少しく引き上げ得べきにあらずやと思はる。大村及び京が峯等の横穴の最高限が、之に伴ひて更に引き上がるべきは異議なし。

裝飾ある古墳と伴ひて、石人・石馬等を置ける古墳の、筑後・肥後地方に多きは、夙に學界に熟知せらるゝ所なり。而して其の石人・石馬等は、埴輪土偶と同一性質のものにして、而も石を以て之を作るは、漢魏の制を移入せしもなるべく、勿論其時代の最高限は、横口式壙の移入と伴ひ、漢魏時代倭人交通の時に在るべし。而して筑後重定なる横口式大古墳の壙壁には、多くの石人類似の裝飾あ

りて、頗る大村・京ゲ峯等の横穴入口附近に施せるものに似たり。千金甲第一號塚の石槨奥壁文樣の一部亦之に類す。是等は孰れも石人の行はれたる後に至りて、之を彫刻に模したるものなるべく、亦以て年代考定の一參考とすべきものなるべし。

五、裝飾古墳を築造せし民族に就いて

著者は肥後・筑後等に多く見る所の裝飾古墳が、近畿其の他の古墳に比して著しき差異ある原因を以て、年代相違の爲にもあらず、民族相違の爲にもあらず、『單に支那文化の影響として之を解すべきの外、考古學の研究は何者をも告ぐるものにあらず』〇一〇三頁と論結せられたり。著者が考古學者として此の結論に到達せられたるは、洵に同情に値す。然れども史家の見る所は然らず。少くも余輩は文獻研究の結果と相啓發して、之を以て民族の差異に歸せんとするなり。著者は此の結論に達する經路に於て、一篇の民族論を試みられ、原史時代に於ける九州人民は、其の名稱の熊襲なるにもせよ、隼人なるにもせよ、或は倭人と稱すべきものにもせよ、畢竟一個の日本人のみ、近畿地方の住民と何等人種上、或は種族上〔「或は」以下の五字正誤表によりて削除〕の差異を有するものにあらず』〇一〇三頁と論斷せられたり。此の論斷は史學雜誌記者によりて、非常なる賞贊を以て迎へられたるものなれども、余輩は文獻上より、はた遺物遺蹟上より、根本的異見を有するものなり。余輩の九州古代民族論は、目下『歴史地理』上に連載中の『倭人考』に於て、逐次論述すべければ、こゝに其の詳細を說かざれども、今本書批評の必要上より、便宜左に其の結論のみを開陳すべし。

余輩は確信す、奈良朝頃なほ薩隅地方に蟠居して、言語・容貌・風俗等を異にすと認められ、法律上夷人として、はた外蕃類似のものとして、取り

扱はれたりし隼人なるものは、少くも天孫民族より見て、明かに異種族なりしに相違なしと。隼人が奈良朝當時に異民族として認められたりしは事實なり。決して著者の謂ふ如く、奈良朝頃の史家が然かく考へたりしものにあらずして、當時の政府が然か公認して取り扱ひしものなり。そは大要『倭人考』中の一篇なる『隼人考』に於て論述せり。而して奈良朝頃に於て薩隅のみに住すと認められし隼人種族は、嘗ては九州全土より、四國・中國・近畿・東海・北陸等に迄も蔓延したりき。そは德川時代に於て北海道にのみ住すと信ぜられたりし蝦夷が、嘗ては奥羽・關東より、引いては中國・九州にまで住居せしと同一狀態の下にありきと考ふるなり。而も是等の蝦夷は漸次熟化して、有史時代には北越・奥羽にのみ之を見るべきの有樣となり、平安朝中頃以後に至りては、其奥羽のものも多く熟蝦夷となり、大和民族と混血し、風俗に於ても頗る他の內地の俗と相類するに至りしものなり。而して余輩は、漢魏時代に於て支那と交通せし倭人なるものは、奥羽に於ける平安朝中頃以後の蝦夷の此の狀態と比すべきものなりと考ふるなり。かくて其倭人は夙に支那と交通せし結果として、往々支那の文物を移入し、墳墓の制の如きも、早く之に倣ひしもの多かりしが如し。斯くの如きは啻に余輩が然かく直覺すと謂ふにはあらず、一々確乎たる憑據の上に得たる結論なり。たゞこゝに之を詳論するの暇なきを憾むのみ。而して其の隼人はもと海幸彦にして、各地に海部として存するもの亦是に屬し、中には農民と化し、山人となりしも亦少からざりき。斯くて其の混血熟化せるものは、漸次大和民族中に沒入し、其の未だ全く融合するに至らざるものは　奈良朝頃に於てなほ國史に、染木綿を以て額髮結へる肥人として區別せらるゝなり。漢史に所謂倭人の多數は、奈良朝頃

に至りては既に多く大和民族中に沒入し了りたるなるべし。而も其の南部地方、即ち隼人が依然夷人として殘存せし薩隅に近き地方の倭人にありては、當時なほ肥人として區別せらるゝ或るものを存せしなり。而して余輩は、肥後・筑後等に於て石人石馬を有し、或は是等裝飾を有する古墳墓の多きは、此の肥人の遺せるものなりと考ふるなり。斯くの如くにして、此等の地方にのみ此の特殊の古墳墓の多く存する理由は解せらるべし。彼等は支那と交通して其の文化を受け、夙に横口式の墳墓を作ると共に、又一方に於ては天孫民族と同化して、副葬品等に彼此類似の風俗を有せしこと多きを示すと雖、なほ奈良朝の頃にまで、或る地方に於ては染木綿に額髮結へるが如き固有の風俗の幾分を存し、時に隼人の叛亂に黨して立ちし程にて、其の帶ぶる刀劍には、後代までも隼人司の隼人が帶びたる頭椎の太刀を帶び、或る時代まで、所謂直孤紋及び、丸模樣・三角模樣等、南方系統と思はるゝ裝飾を墳墓に施こすを廢せざりしなり。而して其の墳墓が、特に肥後・筑後等に多きは、斯くの如き墳墓を造るの習俗ある時代に於て、此の地方にのみ最も多く此の種族殘存し、筑前・肥前等のものは、夙に熟化し了りてもはや之を見る少かりし爲ならずんばあらず。然れどもなほ中國其の他にも此の風を有する族なかりしにはあらず。播磨風土記には、日向肥人朝戸君の播磨に住せし傳說あり、雄畧紀には播磨に御井隈人文石小麻の名見ゆるなり。備中に同系の墳墓ある以て解すべし。若し夫れ諸國の墳墓より所謂直孤紋を附したる頭椎劍を發見し、近畿に同種の紋樣ある埴輪を發見するが如きは、古史の記事の明かに示すが如く、當時肥人・隼人等が久米部の兵士として、若くは貴顯の近習として、多く內地に移住したりし結果なりと解して通ずべきなり。

余輩の確信右の如し。然るに著者は文獻深く徵するに足らずとし、『人種學的の調査完からず、言語學上の研究完からざる今日に於て』、專ら考古學上より說を立てたりと言はる。人種學上及び言語學上より我が民族を論ぜんとする事に於ては、余自から說あり。文獻亦明かに徵するに足るものあるは、既に一部分『歷史地理』上に之を說き、將來又引續き之を說かんとする所なり。されば是等は今暫く之を擱き、單に遺物遺蹟の上より、試みに著者に一問を呈せんか。著者は是等の古墳築造者を以て、『畢竟一個の日本人のみ、近畿地方の住民と何等差異なきものなり』と言はる。果して然らば何が爲に是等裝飾ある古墳が、特に肥後・筑後地方にのみ多く存して、筑前以北若くは近畿に、之を見る然かく甚だ少きやと。著者は單に『支那文化の影響』として之を解せんとす。而も支那と交通あるは、肥後・筑後地方よりも、むしろ筑前・肥前、若くは近畿地方に多かるべきと言を俟たず。然るにも拘らず、是等の地方に、之を見るなくして、比較的交通少かるべき肥後・筑後等に之を見る多きは如何。更に其の文樣が、所謂直孤紋と云ひ、極めて簡單なる三角紋・丸形紋と云ひ、むしろ南方系統に近くして、支那の文化に關係少かるべきは如何。是等は悉く人種と言語と文獻とを離れて、單に遺物遺蹟上よりのみ論ずるも、到底解釋し得ざる所なるべきにあらずや。

之を人種學上の研究に就いて言はんか、從來人種學者が古代の遺骨を發見したる場合に於ては、常に之を所謂日本人なるものの骨骼に比して說をなさんとするを見る。然れども余輩は、此の『日本人の骨骼』なるものに就きて疑を抱く。日本人とは余輩の所謂大和民族なり。其の骨骼の示す計數は、極端より極端にまで涉り、孰れを以て其の標準とすべきやに苦まずんばあらざるなり。蓋し

所謂大和民族とは、天孫民族及び天孫民族に混血同化したる土人の總稱にして、風俗・習慣・言語・傳說に於ては、夙に皆同一なるものとなり了れりと雖、骨骼に於てはなほ遠き祖先のそれを遺傳する事多かるべきなり。されば今日に於て、骨骼の調査のみより之を所謂日本人の骨骼に比較して、民族を決せんは頗る難事なりと謂はざるべからず。固より之を成すの希望なきにあらざるべし。たゞ其の事の困難にして、是のみを以てしては、未だ俄かに所謂日本人なる大和民族と比較して、民族上の斷定をなす能はざるべき者あるを言ふのみ。更に之を言語學上の研究に就いて言はんか。或る論者は倭人の言語中日本語と同じきものあるの故を以て、彼是直ちに同一なりと言はんとす。然らば試に問はん、漢魏時代の倭人と同一事情の下にありきと思考せらるゝ我が平安朝頃の奥羽の熟蝦夷が、不完全ながら日本語を使用せりとて、彼等亦同一日本人なりと斷定するの勇氣あるかと。論者或は又言ふ。日本語は近傍の他の國語と著しく相違せり。是れ日本人が甚だ遠き以前より此の島國に渡來せる証なりと。然れども言語は民族の接觸混淆するよりして著しく變化すべし。然らば、土着先住民との混淆より成り、久しく此の島國に孤立棲息せる大和民族の言語が、本來の天孫民族の言語を其のまゝに傳へ得たりとは、何人か之を証し得るものぞ。單語に於て、語法に於て、此の島國渡來以前の天孫民族の語と、後の國語との間に著しき相違を來せるものあるべきは、何人も否定し得ざる所なるべきなり。更に之を現今教育ある日本人の使用する言語に就いて見よ。其の單語中には支那傳來のもの多きに居るにあらずや。之れ支那の文化の移入に伴ひて比較的短年月間に來れるもの、古事記・萬葉集の時代より、僅々千二百年にして此の著しき相違を來せるを見ば、思ひ半

ばに過ぐるものあらん。更に之を僻陬なる無教育者の階級間に使用せらるゝ俗語に就いて見よ。論者等が常に傍近諸國の民族の俗語と比較して說を爲さるゝ我が雅言との間に著しき相違あるは、何人も認むべき所ならずや。余輩は根本に於て、論者等が他の俗語を取りて我が雅言にのみ比較し、常に說を爲さんとする事に於て亦一の疑を有するなり。我が邦は海島に孤立し、大陸の諸民族は壤を連ねて相接觸す。同一語系に屬する大陸の諸民族の言語が比較的相近く、孤立せる我が島國語が是等とは稍遠き距離を有したりとて、何ぞ怪むと。須ひんや。更に論者は言ふ、我が數詞は他に類例なき特異なるものにして、同語系の大陸諸民族の數詞の彼是稍近きものあるに似ず。是れ邦人が未だ數詞の獨立を爲さゞる程の遠き以前より、此の島國に來りし明證なりと。然れども、高句麗に於て古く我數詞と同一のものゝ行はれたりし事は、內藤・新村両博士によりて、既に證明せられたるにあらずや。若し論者の說の如く、國語の數詞が果してウラルアルタイ語族中に於ても一種特異のものならんには、高句麗人は比較的天孫民族の最も近き親類なりとの結論に到達せずや。而も後の朝鮮人は夙に此數詞を捨て、論者の博學にしてなほ且つ之を知らざりし程にも、世に忘れられたりしなり。蓋し言語の變遷は、必ずしも或る言語學者の思考せらるゝが如く、然かく長年月を要するにも限らざるものなるべきか。果して然らば言語の故を以て、邦人の『融合が早く既に原史時代以前に成立して、當時は人種上には九州も本土も一の日本人が住居せしもの』(三頁)〇一〇とのみ解すべきにあらざるなり。若し夫れ『九州地方の地名に於て、アイヌ語以外に外國語を以て適當に解釋すべきものゝ多く存するを知らず』(一頁)〇一〇と謂ふが如きに至りては、九州地方の地名をアイヌ語を以て解し得る

もの以外、悉く日本語を以て適當に解し得て後に謂ふべきのみ。隼人の言語今是を知るを得ず。何ぞ之に起因するものなしと謂はんや。

更に遺物・遺蹟に就いては、余輩は所謂彌生式土器を以てもと隼人系統の物なりとし、之を出だす石器時代遺蹟は、彼等の祖先の遺せるものなりと解するなり。然るに彼等の多數は夙に天孫民族に熟化して、所謂大和民族中に沒入し、土師部（はじべ）として永く其の土器を製作せしが故に、後の大和民族の遺蹟よりは、朝鮮式の所謂齋部土器と伴ひて、此の系統の土器をも出だすなり。而して余輩の觀察する所によれば、著者の言はるゝ如く、『此等九州の古墳に特殊の土器の存在するを聞かず、均しく祝部土器なり』（二〇一頁）といふが如きは事實にあらず。近畿其の他の地方の古墳よりも、祝部土器に伴ひて彌生式系統の土器を出だす事敢て珍らしきにあらず。特に紀伊海部地方の古墳の如きは、殊に後者を多く混ずるなり。而して九州地方の墳墓に於て、往々特に其の著しきものあるは、余輩の多く實見せし所なり。嘗て山城大住なる横穴より多く此の種の土器を出せし事は、畿内に於て珍らしき實例なれども、此の地がもと大隅隼人の移住地として、室町時代に迄もなほ隼人司との關係を保ちし事を思はば、之を九州地方の古墳に比して、自ら釋然たるものあるに似たらずや。

六、結論

評論多岐に渉り、思ひの外に長文となれり。而も其の第三章以下に於て說く所のものは、本書に取りては、むしろ末節なり。其の論の當否如何に拘らず、敢て本書の價値の輕重をなすべきにあらざるなり。余輩の今此の論を爲すを得るもの、亦一は本書によりて得たる新知識の賜なり。忠實なる著者の報告が、本來學者に新研究資料を與ふるにありて、『敢て自ら學說を建立せんとするにあら

ず』とは、著者の卷初に公言せらるる所、余輩著者の此の誠意に酬ひんが爲めに、自ら揣らず管見を披瀝したり。而も是れ眞に著者の目的に副ひ、相共に研究の歩を進めんとするの微意に出づるもの、著者必ず之を甘受せらるべきを信ずるなり。

若し夫れ余輩の九州古代住民に關する詳細なる研究は、逐次『歴史地理』に登載すべき『倭人考』に就いて見よ。而して余輩の此の研究が、直接、間接に、本書によりて如何に多くの益を受けつゝあるかを見よ。本書は實に考古學的研究報告として、よく其の目的を達したるものなり。學者は本書によりて多大の利益を蒙るべきなり。こゝに重ねて此の有益なる資料を提供せられたる著者に對つて敬意を表す。

紹介

◎圖書

◎海外交通史話　文學博士　辻　善之助著

世を早うせし著者の愛兒の名と其命日とに因みて、海洋關係の史篇、國民發展に關する史話を輯め、舊稿・新編合せて廿六を選び國民學藝叢書の第四編として刊行したるものなり。「任那の興廢と物部竈鹿火の娶及び調伊企離と其妻並に大伴部博麻の義烈」以下「日本文明の性質について」に至る、菊版四九六頁あり。其中、「八十歳の高齢を以て求法の途中南洋の逆旅に薨ぜられし高岳親王」については、親王が志半にして遷化せられし羅越國は今のマレー半島なりとの桑原博士の説に贊し、「鉢倉幕府の外征計畫と國民の敵愾心」にては、元寇の時、時宗尚弱齢にして斯る大事を爲すに足らず、寧ろ連署政村によりて處決せられたりとの説を取し、政村は文永十年に卒去せる事、當時一般に早熟の風ありし事よりして、時宗の果斷に出でしものなりと論じ、「豐臣秀吉の耶蘇教禁制」にては其の原因は葡萄牙商人及宣教師の不穩なる行動にありしと斷じ、「豐臣秀吉の支那朝鮮征伐の原因」は秀吉勘合を復せんとして成らず、乃ち征明を決せりとて五箇の徴證を擧げ、「江戸時代に於ける